５　古天神古墳出土須恵器の編年的位置づけ

岩本　真実

はじめに

山陰地域の須恵器研究は山本清により先鞭をつけられた。古天神古墳出土須恵器についても〔山本 1956・1960〕で山陰地域における位置づけが試みられている。以降、〔角田 1993〕でより詳細な年代的考証が行われ、〔大谷 1996〕でも出雲地域の須恵器編年の中での位置づけが示されてきた。本稿では、まず従来の位置づけについて整理し、発掘調査による須恵器の出土量増加を受けた現在的視点から各器種について再検討を行うことで、古天神古墳出土須恵器の編年的位置づけを試みたい。

（１）従来の位置づけ

古天神古墳出土須恵器をはじめに詳細に検討したのは山本清である。山本は、出土遺物の明らかな石棺式石室である古天神古墳と西宗寺古墳の須恵器の観察に基づき、出雲において石棺式石室が採用された時期を示した〔山本 1956〕。古天神古墳の須恵器に関しては、実査した資料を図示し[(1)]、蓋付脚付壺、高坏、瓿、蓋坏はいずれも硬化・堕落した要素が認められるがなお整正な部類に属しており、「初期の古い様相をもつものとは云えない」が「比較的早い時期に属する」ものと結論づけ、大半の器種はこの段階で山本が示していた須恵器蓋坏の変遷〔山本 1955〕の中の第三段目に位置づけられた。その後〔山本 1960〕で山陰の須恵器を４時期に区分した結果、古天神古墳の須恵器はそのⅢ期に位置づけられた。山本編年Ⅲ期はかなりの幅を持っていたため、その後増加した資料を基に、蓋坏口縁端部の段の有無を主な指標として細分が試みられた〔足立・丹羽野 1984、萩本・佐古 1984、門脇 1985、西尾・丹羽野 1991〕が、この時期に試みられた細分は横穴墓出土資料に基づくものであり、古天神古墳出土須恵器を基準資料として挙げているものはみられない。また、山本編年Ⅲ期の細分を陶邑編年と対照させた〔渡辺ほか 1991〕では、古天神古墳は TK43 に対応するⅢ期新段階に位置づけられている。

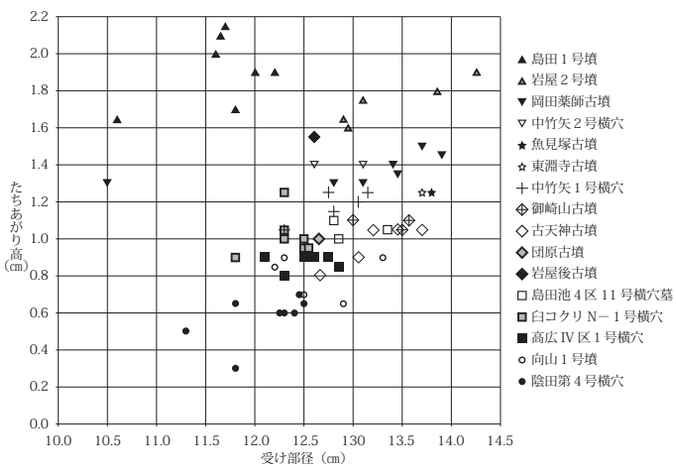
古天神古墳の須恵器が次に具体的に論じられたのは角田徳幸による。角田は石棺式石室の系譜を辿るにあたり、初期の石棺式石室とされた古天神古墳と伊賀見１号墳の須恵器を詳細に検討した〔角田 1993〕。古天神古墳には金環・銀環の個数から３人以上の被葬者を想定して須恵器を新古２段階に区分し、古相を TK10・Ⅱ型式２～３段階、新相を TK43・Ⅱ型式４段階と併行させた。一方、伊賀見１号墳出土須恵器は TK43・Ⅱ型式４段階に位置づけた。陶邑編年との併行関係についての根拠は明示されていないが、口径が大きな坏類や環状把手をもつ提瓶、脚基部の太い大型高坏が古相とされており、新相には口径の小さな坏類や平底の瓿、把手が環状ではない提瓶がみられる。これらの関係を陶邑編年と対照して併行関係を考慮したと思われる。

その翌年、大谷晃二は複数の器種の型式組列とその組み合わせを整理し、さらに畿内の須恵器編年や、馬具・装飾大刀との共伴関係も考慮して、出雲の須恵器の地域性や畿内との併行関係をも加味した須恵器編年を提示した（以下、大谷編年あるいは大谷分類）〔大谷 1994〕。大谷の研究により、かねてより指摘されていた出雲地域の須恵器に認められる地域性、特に、坏蓋肩部の２条沈線によるア

第８表　古天神古墳出土蓋坏各部位の特徴

		① 口径 受け部径	② たちあがり高	③ 回転ヘラケズリ	④ 肩部表現	⑤ 口縁端部	大谷分類
蓋	40-1	13.5	-				A4
	40-2	12.7	-				A3
	40-3	12.8	-				A4
	40-4	12.1	-				A3
	40-5	12.1	-				A4
身	40-6	13.7	1.05		-	-	
	40-7	13.45	1.05		-	-	
	40-8	13.2	1.05		-	-	
	40-9	13.05	0.85		-	-	
	40-10	12.65	0.8		-	-	

※網掛け濃度が高いほど新しい特徴を示す
※古相→新相：①大→小
②高→低
③丁寧（Ⅰ）→粗雑、ケズリ残し多（Ⅱ）
④突帯や稜（B）→形骸化した沈線やゆるい稜（C）
⑤段表現残る（α）→沈線（β）



第 74 図　受け部径とたちあがり高の変遷

クセントや口縁端部の段の痕跡が新しい段階まで残る点等、畿内地域の変遷と一致しない出雲の地域色が明確となった。古天神古墳の須恵器はそこでは扱われてはいないものの、相前後すると考えられる御崎山古墳出土須恵器を出雲３期、伊賀見１号墳出土須恵器を出雲４期の基準資料として挙げている。その後、大谷は御崎山古墳の研究報告のなかで、御崎山古墳の初葬を出雲３期、追葬を出雲４期とし、古天神古墳の須恵器は出雲３期とした〔大谷 1996〕。大谷編年における出雲３期は TK43 と、出雲４期は TK43 の一部および TK209 と併行する。

こういった経緯により、現在、古天神古墳は概ね TK43 と併行する出雲３期として認識されていると言えよう〔丹羽野 1997、池淵 2015 等〕。以下では、古天神古墳の須恵器について、編年的位置づけに有用な特性に着目し、その位置づけを改めて考えてみたい。

（２）各器種の特徴と位置づけ

蓋　　坏　蓋坏の時期差は、①口径／受け部径や②身のたちあがりの高さや傾き、③天井部／底部の回転ヘラケズリの精粗、④蓋肩部におけるアクセントの有無、⑤口縁端部の様相が指標とされる。これらの指標について古天神古墳出土蓋坏の様相を整理すると第８表のようになる。①・②については数値にやや幅があるが、筆者が以前検討した①蓋坏の受け部径と②たちあがり高の変化を示す変遷図〔岩本 2016〕に本報告で得られた数値を当てはめた第 74 図によると[(2)]、出雲３期でも新しい段階から４期の古い時期の分布域にあたる。全体としては受け部径の割にたちあがりがやや低い様相が伺える。③の天井部／底部の回転ヘラケズリには資料により精粗に差がある。出雲３期以降、蓋坏の径は縮小化するが、径の小さい４と５の回転ヘラケズリは非常に丁寧であり、ケズリの精粗と径の変化は必ずしも一致していないことがわかる。粗いヘラケズリの場合、第 39 図のようにケズリ残しが渦巻き状に非常に多く、これは出雲３期以前の資料に丁寧に施される回転ヘラケズリとは大きく異なる。④肩部のアクセントは新相ほど形骸化し消失していくとされる。古天神古墳出土の蓋坏は、全ての蓋に沈線や強いナデにより突帯状表現がなされているが、口径の小さい４と５はやや曖昧である。⑤の蓋口縁端部の様相にも差が認められる。坏蓋の端部は、内面の明瞭な段が次第に端部から離れたやや高い位置へと変化してゆるい段となり、さらに段ではなく沈線表現となって最終的には端部を丸く収めるようになるという変遷を示す〔大谷 1994〕[(3)]。古天神古墳資料ではゆるい段状の表現が認められる２が大谷分類α３類にあたり、４の端部も部分的にナデ消されているもののやや段状を呈するが、いずれも口径が小さく、組み合うと思

われる身のたちあがりも低い。他の蓋は高い位置に沈線がめぐる大谷分類β類である[4]。

これらの蓋坏は、その径から〔角田 1993〕の指摘どおり１・６～８と２・３・９・10、４・５の３群に大きく区分が可能と思われる。１・６～８は径が大きく出雲３期的ではあるが、蓋天井部の回転ヘラケズリは非常に粗く身のたちあがりも高くはない、４期の特徴も兼ねそなえる資料である。２・３・９・10 は、径がやや大きい資料や端部に段が表現されるものを含むものの、粗い回転ヘラケズリが認められる点やたちあがり高が低い点から、出雲４期の特徴を備えている。一方４・５は、径の小ささや肩部のアクセントがやや曖昧な点等出雲４期の資料として捉えられるが、回転ヘラケズリが非常に丁寧な点には古相を留めている。結論として、これらの蓋坏は大きくは３群に区分可能ではあるものの、いずれも出雲３～４期の特徴を兼ね備え、出雲３期のなかでも新しい段階から出雲４期の中でも古い段階の資料の一群と言えよう。

高　　坏　大型の高坏には同一個体か不明ではあるが共通の特徴を持つ坏部 11 と脚部 12 があり、脚上半がしっかりとした太さを有し透かしが完全に貫通する点や、坏部の突帯表現が明瞭な点など、装飾の簡略化や脚部の短小化が始まる出雲４期以前の様相を呈する[5]。完形の高坏 13 も脚部は未だ短小化していないが、上段透かしの上半部が３方ともに完全には貫通していない点や坏部の突帯表現が曖昧で刺突文が欠落している点等、やや簡略化の傾向が認められる[6]。高坏脚部 14 は脚部高がやや低く急激に上部の幅を減じており脚部短小化が認められる出雲４期の資料であろう。古天神古墳の須恵器の中では際立って新しいが、1964 年に採集された破片資料であり、埋葬に伴うものではない可能性が高い。

瓻　瓻は、出雲３期に長頸化を達成した後次第に短頸化し、頸部や胴部の施文が消失していくという変遷をたどる〔大谷 1994〕。口縁部は短いものから長いものへと変化し、頸部の基部は次第に細くなる。また、古相の瓻は頸部からあまり屈曲せずに口縁部が外反するが、次第に屈曲が強くなり口縁部が起き上がると考えられる。古天神古墳出土資料は、施文に空白部分や掠れが認められ、頸部中位の沈線も全周しないため、やや粗雑化が認められる。口縁部はあまり起き上がらずに頸部からの延長で外反するが、頸部は比較的短い。この頸部の長短に関しては、坂本豊治が出雲市中村１号墳出土須恵器の報告に際して検討している。本稿に関連する大谷分類 A 型については、大谷編年で示されていなかった A4 型と A5 型の分類基準として器高に対する頸部高の割合を提示した〔坂本 2012〕。これによれば古天神古墳の瓻は A5 型とされ、やや短い部類に入る。ただし、A4 型と A5 型はいずれも出雲３期以降に比定されており〔大谷 1994〕、現在のところ明確な時期の指標とはされていない。この点に関しては、提瓶との共伴関係から後述したい。

直 口 壺　直口壺は出雲４期に多く認められる器種である。筆者は以前、口頸部がやや外反し肩部の張るものを直口壺 B 型とした〔岩本 2016〕。B 型は口頸部が伸長するとともに次第に外反がゆるくなり口頸部上半がわずかに内湾する変遷を示す。口頸部の外反がゆるくなり上方へ伸びるようになる段階は、直口口縁の長頸壺の出現とも一致し、出雲４期の蓋坏型式や直口系の壺瓶類と共伴する例が多い。また、これ以降に資料数も急増する。これらの特性から、この段階以降の資料を定型化した直口壺 B 型と捉えて B2 型に区分し、出雲４期の指標の一つとした。ただ、B2 型は定型化した資料ではあるものの資料数がかなり多いため口頸部の高さや外反具合にはある程度の幅がある。〔岩本 2016〕では古天神古墳の直口壺は定型化直前段階としたが、今回資料を実見し再検討した結果、口頸部の外反がゆるく十分に張った肩部を有する点をより大きく評価するならば定型化した段階と捉え直しても良いと考えた。器形の変化というのは漸移的なものであり型式や時期を決定することが非常に困難な資料も存在するが、この資料はまさにその様な過渡的な位置づけにある。

提　　瓶　提瓶は口縁部と把手の形態に基づいて分類されている〔大谷 1994〕。古天神古墳からは大小２点の提瓶が出土しており、いずれも広口系口縁で大谷分類Ｂ型にあたる。大型の 17 はしっかりとした環状把手をもつ B1 型、一方 18 は側面にやや凹む部分もみられ環状把手を意識したつくりではあるものの完全に痕跡化した把手で B3 型に分類される。しかし、大谷分類が提示された時点では資料数に制約があったためか B3 型の存続時期は明確にされていない。そこで、その後の資料の増

第９表　出雲東部における提瓶型式と共伴須恵器一覧

遺 跡 名	報告番号	型　式	共伴資料	文　　献
岡田薬師古墳	18-9	ＡⅣイ	坏 A3 ／盛土内	島根県教育委員会 1986
うそ谷第２号穴	35-6	ＡⅣイ	坏 A3	島根県教育委員会 1969b
高広遺跡Ⅰ区３号横穴	27-19	ＡⅣイ	坏 A3, 提瓶ＡＩア , 直口壺 A	島根県教育委員会 1984
中竹矢１号横穴	102-159	ＡⅣウ	坏 A3 ／玄室 , 他に坏 A3, 長脚無蓋高坏 A3, 甕 A5, 直口壺 B1 ／墓道	島根県教育委員会 1983
御崎山古墳	28-19	ＡⅣウ	坏 A3, 甕 A4, 直口壺 B1（脚付）／初葬 , 他に坏 A4, 有蓋高坏 A2a, 長脚無蓋高坏 A2a, 甕 A5, 提瓶ＢⅠ1,BⅡ2-1, 長頸壺／追葬　※報文とは異なる	島根県教育委員会・島根県立八雲立つ風土記の丘 1996
高広遺跡Ⅰ区３号横穴	27-20	ＡＩア	坏 A3, 提瓶ＡⅣイ , 直口壺 A	島根県教育委員会 1984
田和山１号墳	5-1,2	ＢＩ４	坏 A3	松江市教育委員会 1991
島田池遺跡６区８号横穴墓	257-31,32	ＢＩ４	坏 A3,A4, 長脚無蓋高坏 A2b,A3, 低脚無蓋高坏 A4, 直口壺 B1 ／玄室・墓道	島根県教育委員会 1997b
南尾横穴墓	5	ＢＩ４	坏 A3,A4,A5, 直口壺 B2	島根県教育委員会 1988
小倉見谷横穴群４号穴	5-15	ＢＩ４	坏 A4?, 甕 A5,A7, 提瓶ＢⅡ2-2, 直口壺 B2	島根県教育委員会 1989b
岩屋遺跡Ⅰ区５号墳２号石棺	49-6	ＢＩ１	坏 A3	島根県教育委員会 2001a
古天神古墳	41-17	ＢＩ１	坏 A3,A4, 長脚無蓋高坏 A2a,A2b, 甕 A5, 提瓶ＢⅢ3, 直口壺 B2	本書
御崎山古墳	29-22, 30-23	ＢＩ１	坏 A4, 有蓋高坏 A2a, 長脚無蓋高坏 A2a, 甕 A5, 提瓶 BII2-1, 長頸壺／追葬 , 他に坏 A3, 甕 A4, 提瓶ＡⅣウ , 直口壺 B1（脚付）／初葬　※報文とは異なる	島根県教育委員会・島根県立八雲立つ風土記の丘 1996
臼コクリ遺跡Ｆ区２号横穴墓	167-22	ＢＩ１	坏 A4,A5 ／玄室・前庭・羨道	島根県教育委員会 1997a
小丸子山横穴	32	ＢＩ１	坏 A4?, 長脚無蓋高坏 A3, 低脚無蓋高坏 A4, 甕 A5, 直口壺 B2	島根県教育委員会 1969a
狐谷横穴群 10 号横穴	18-10-1	ＢＩ１	坏 A4, 長脚無蓋高坏 A3, 長頸壺／玄室 , 他に坏 A5, 甕 A5, 提瓶ＢⅡ2-2, 直口壺 B2 ／前庭	島根県教育委員会 1977
遅倉横穴墓群４号横穴墓	44-1	ＢＩ１	低脚無蓋高坏 A4, 横瓶 , 平瓶 C2 ／墓道 , 他に坏（非出雲的）, 長脚無蓋高坏 A6, 甕 A7, 提瓶ＢⅡ2-2, 長頸壺／玄室	松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 1999
御崎山古墳	28-20,21	ＢⅡ2-1	坏 A4, 有蓋高坏 A2a, 長脚無蓋高坏 A2a, 甕 A5, 提瓶ＢⅠ1, 長頸壺／追葬 , 他に坏 A3, 甕 A4, 提瓶ＡⅣウ , 直口壺 B1（脚付）／初葬　※報文とは異なる	島根県教育委員会・島根県立八雲立つ風土記の丘 1996
八神横穴墓群１号横穴墓	7-14	ＢⅡ2-1	坏 A4, 提瓶ＢⅡ2-2,BⅢ3, 直口壺 B2	安来市教育委員会 2001
臼コクリ遺跡 N-3 号横穴	40-1	ＢⅡ2-1	玄室 , 他に坏 A5,A6, 長脚無蓋高坏 A3 ／羨道	島根県教育委員会 1994
菅沢谷横穴群 C-1 号横穴墓	16-20	ＢⅡ2-1	坏 A4, 低脚無蓋高坏 A4, 提瓶ＢⅢオ ,CⅢオ , 直口壺 B2	財団法人松江市教育文化振興事業団 1994
菅沢谷横穴群 C-5 号横穴墓	28-24	ＢⅡ2-1	坏 A4, 長脚無蓋高坏 A4, 甕 A4,A5, 提瓶ＢⅡ2-2,BⅢオ , 直口壺 B2, 長頸壺	財団法人松江市教育文化振興事業団 1994
袋尻横穴墓群２号横穴墓	144-6, 146-27	ＢⅡ2-1	坏 A4, 低脚無蓋高坏 A3, 提瓶ＢⅢ3, 直口壺 B2 ／玄室・墓道 , 他に甕 A5? ／小横穴	松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 1998
袋尻横穴墓群３号横穴墓	153-11	ＢⅡ2-1	坏 A4,A5, 直口壺 B2	松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 1998
伊賀見１号墳	8-8	ＢⅡ2-2	坏 A4, 甕 A5, 提瓶ＢⅢ3	角田 1993
八神横穴墓群１号横穴墓	7-15	ＢⅡ2-2	坏 A4, 提瓶ＢⅡ2-1,BⅢ3, 直口壺 B2	安来市教育委員会 2001
菅沢谷横穴群 C-5 号横穴墓	28-23	ＢⅡ2-2	坏 A4, 長脚無蓋高坏 A4, 甕 A4,A5, 提瓶ＢⅡ2-1,BⅢオ , 直口壺 B2, 長頸壺	財団法人松江市教育文化振興事業団 1994
狐谷横穴群 10 号横穴	18-10-5	ＢⅡ2-2	坏 A5, 甕 A5, 直口壺 B2 ／前庭 , 他に坏 A4, 長脚無蓋高坏 A3, 提瓶ＢⅠ1, 長頸壺／玄室	島根県教育委員会 1977
松本３号横穴墓	18	ＢⅡ2-2	坏 A4,A5, 甕 A5, 直口壺 A ／玄室・墓道	島根県教育委員会 1997c
小倉見谷横穴群４号穴	5-16,17	ＢⅡ2-2	坏 A4?, 甕 A5,A7, 提瓶ＢⅠ4, 直口壺 B2	島根県教育委員会 1989b
島田池遺跡４区９号横穴墓	127-24	ＢⅡ2-2	坏 A5,A6,A7, 長脚無蓋高坏 A7, 直口壺 B2	島根県教育委員会 1997b
遅倉横穴墓群４号横穴墓	42-10	ＢⅡ2-2	坏（非出雲的）, 長脚無蓋高坏 A6, 甕 A7, 長頸壺／玄室 , 他に低脚無蓋高坏 A4, 提瓶ＢⅠ1, 横瓶 , 平瓶 C2 ／墓道	松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 1999
古城山遺跡３号横穴	60-1	ＢⅡ2-2	坏 A6 ～ 7, 提瓶ＢⅢオ ,CⅢオ , 他に坏 A6 ～ 7, 甕 A5 ／石棺	東出雲町教育委員会 2008
古天神古墳	41-18	ＢⅢ3	坏 A3,A4, 長脚無蓋高坏 A2a,A2b, 甕 A5, 提瓶ＢⅠ1, 直口壺 B2	本書
伊賀見１号墳	8-9	ＢⅢ3	坏 A4, 甕 A5, 提瓶ＢⅡ2-2	角田 1993
八神横穴墓群１号横穴墓	7-13	ＢⅢ3	坏 A4, 提瓶ＢⅡ2-1,BⅡ2-2, 直口壺 B2	安来市教育委員会 2001
菅沢谷横穴群 C-1 号横穴墓	16-15	ＢⅢ3	坏 A4, 低脚無蓋高坏 A4, 提瓶ＢⅡ2-1,CⅢオ , 直口壺 B2	財団法人松江市教育文化振興事業団 1994
袋尻横穴墓群２号横穴墓	146-26	ＢⅢ3	坏 A4, 低脚無蓋高坏 A3, 提瓶ＢⅡ2-1, 直口壺 B2 ／玄室・墓道 , 他に甕 A5? ／小横穴	松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 1998
向山１号墳	24-26 ～ 28	ＢⅢエ	坏 A6, 有蓋高坏 A2a,D, 長脚無蓋高坏 A4, 甕 A6,A7,B2（脚付）, 提瓶ＣⅢエ , 長頸壺	松江市教育委員会 1998
菅沢谷横穴群 C-5 号横穴墓	27-15	ＢⅢオ	坏 A4, 長脚無蓋高坏 A4, 甕 A4,A5, 提瓶ＢⅡ2-1,BⅡ2-2, 直口壺 B2, 長頸壺	財団法人松江市教育文化振興事業団 1994
古城山遺跡３号横穴	60-2	ＢⅢオ	坏 A6 ～ 7, 提瓶ＢⅡ2-2,CⅢオ , 他に坏 A6 ～ 7, 甕 A5 ／石棺	東出雲町教育委員会 2008
島田池遺跡６区 14 号横穴墓	293-23	ＣⅡ2-2	坏 A4,A5,A6, 提瓶ＢⅡ2-2, ／玄室須恵器床周辺 , 他に長脚無蓋高坏 A4, 直口壺 B2, 平瓶 C2 ／玄室奥壁側	島根県教育委員会 1997b
渋山池古墳群１号横穴墓	46-27	ＣⅡ2-2	坏 A4 ～ 6?,A7, 有蓋高坏 D, 長脚無蓋高坏 A4 ～ 5?, 提瓶ＢⅢ3, 平瓶 C2	島根県教育委員会 1998
向山１号墳	24-25	ＣⅢエ	坏 A6, 有蓋高坏 A2a,D, 長脚無蓋高坏 A4, 甕 A6,A7,B2(脚付), 提瓶ＢⅢエ , 長頸壺	松江市教育委員会 1998
高広遺跡Ⅰ区２号横穴	21-7	ＣⅢエ	坏 A4,A5 ／追葬面上 , 長脚無蓋高坏 A4 ／玄室床面	島根県教育委員会 1984
高広遺跡 IV 区１号横穴	21-7	ＣⅢエ	坏 A4,A5,A6, 甕 A5 ／玄室床面 , 坏 A4, 長脚無蓋高坏 A5 ／追葬 , 長脚無蓋高坏 B2, 低脚無蓋高坏 A4 ／羨道	島根県教育委員会 1984
菅沢谷横穴群 C-1 号横穴墓	16-14	ＣⅢオ	坏 A4, 低脚無蓋高坏 A4, 提瓶ＢⅡ2-1,BⅢオ , 直口壺 B2	財団法人松江市教育文化振興事業団 1994
古城山遺跡３号横穴	63-4	ＣⅢオ	坏 A6 ～ 7, 提瓶ＢⅡ2-2,BⅢオ , 他に坏 A6 ～ 7, 甕 A5 ／石棺	東出雲町教育委員会 2008

加を踏まえ、今一度提瓶の整理を試みた。検討の対象は出雲東部で出土した提瓶であり[7]、基本的な分類基準は大谷分類に依拠している（第75図）。上位の分類基準として口縁部の形態を指標とし、A型は外反した口縁の端部が丸く肥厚あるいは内湾するものである。B型は広口状の口縁部で、端部には貼り付けや折り曲げにより拡張し段状にしたものと、上下にわずかに拡張させて面をなすものがある。C型は直口口縁である。把手の形状による下位区分には、カギ状からコブ状、ボタン状への変遷として設定されたア～オの区分と、環状からコブ状への変遷を示す１～３、４の区分が提示されている。本稿では、ア型は環に高さがありしっかりと環状を保つ把手として１・４型と共にⅠ型とした[8]。ア型；環があまり下方へ広がらず上下端が共にしっかりと接合しているもの、４型；環があまり下方へ広がらず下端は接合しない、あるいはかるく接触しているもの、１型；環はやや下方へ広がり上端はしっかり接合され下端は貼り付けのナデが下方へ引き延ばされずに貼り付けられたものである。２型は大谷分類では「ひしゃげて環の孔が小さくなるかつぶれて孔の痕跡のみになったもの」とされているが、これを2-2型とし、環が小さくなったり潰れたりしておらず高さを保つが把手の下端が下方へ長く引き延ばされてナデ付けられているものを2-1型とし、合わせて、把手の下半が長く下方へ引き延ばして貼り付けられるⅡ型とした。環状やカギ状の把手が痕跡化しコブ状・ボタン状を呈する３・エ・オ型はⅢ型とした。３型は三角形等の高さのある形態で、一部側面に凹みを有し、把手の痕跡を残すものもある。エ型は把手とは完全にかけ離れたコブ状のもの、オ型は平たいボタン状のものである。カギ状把手はⅣ型とし、イ型はしっかりと長いカギ状把手、ウ型はイ型より短いものである。環状やカギ状の把手がボタン状へと退化するという型式学的変遷は大谷の示したものと同様であるが、2-1型の存在により、下方へ広がらないしっかりとした環状把手（Ⅰア型）から、環が下方へ広がり（Ⅰ１型）、下端の接着面が下方へ伸び（Ⅱ2-1型）、孔がつぶれ（Ⅱ2-2型）、コブ状（Ⅲ３→Ⅲエ型）、ボタン状（Ⅲオ型）へと退化する変遷が想定される。大きな画期としては、実用性を喪失し始めるⅡ型の発生、痕跡化するⅢ型の発生が挙げられる。

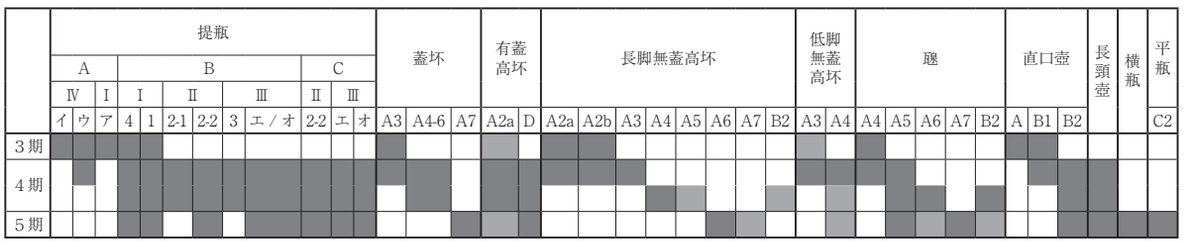
以上の指標により分類した提瓶の変遷とその時期を確認するため、比較的良好な出土状況の提瓶各型式とそれに共伴する資料の型式を第９・10表に示した[9]。横穴系埋葬施設の特性から追葬が認められる資料が多く時期を限定できない場合が非常に多いため、おおまかな変遷を確認できるに過ぎないが、各器種の登場や存続時期についてある程度把握することはできよう。これによると、ＡⅣイ型とＡⅠア型は一部蓋坏A3型、直口壺Ａ型と共伴しており、提瓶のなかでも最古相を示すものと考えられる。Ａ型のなかでもカギ状把手の短くなったＡⅣウ型は、蓋坏A3型の他、直口壺B1型や瓻A4型とも共伴するが、長脚無蓋

第10表　出雲東部における提瓶と須恵器各器種の共伴関係

提瓶		A			B							C		
		Ⅳ		Ⅰ	Ⅰ		Ⅱ		Ⅲ			Ⅱ	Ⅲ	
		イ	ウ	ア	4	1	2-1	2-2	3	エ／オ		2-2	エ	オ
蓋坏	A3	■	■	■	■	■			■					
	A4				■	■	■	■	■	■		■	■	■
	A5				■	■	■	■	■			■	■	
	A6						▒	■		■		■	■	■
	A7							■		■		■		■
有蓋高坏	A2a					■	■			■			■	
	D									■		■	■	
長脚無蓋高坏	A2a					■	■		■					
	A2b				■	■			■					
	A3		■		■	■	▒	▒						
	A4						■	■		■		■	■	
	A5												▒	
	A6					■		■						
	A7							▒						
	B2												▒	
低脚無蓋高坏	A3						■		■					
	A4				■	■	■	▒	■				▒	■
瓻	A4		■				■	■	■	■				
	A5		■		■	■	■	■	■	■			■	■
	A6									■			■	
	A7				■	■		■		■			■	
	B2									■			■	
直口壺	A	■		■				■						
	B1		■		■									
	B2				■	■	■	■	■			■		■
長頸壺						■	■	■					■	
横瓶						■		▒						
平瓶	C2					■		▒				■		

■ 同一の古墳・横穴でも出土場所が異なる資料

第 11 表　出雲東部における提瓶と須恵器各器種の変遷

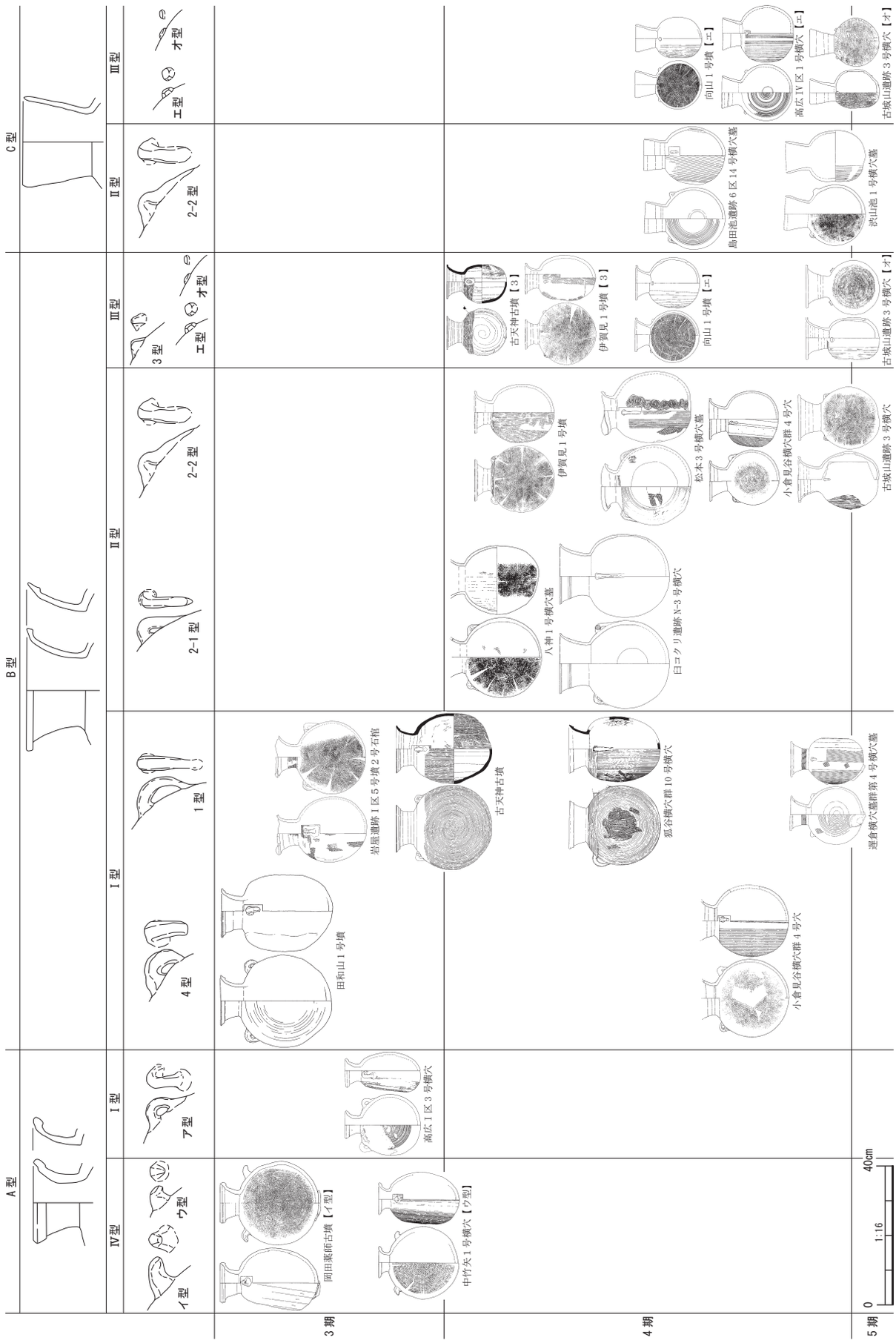


高坏 A3 型や瓹 A5 型といった型式学的にはやや新相を示す資料とも伴出しており、ＡⅣイ型やＡⅠア型より後出するか時期幅を見積もる余地がある[10]。Ｂ型のうちⅠ型はＡ型と同じく蓋坏 A3 型、直口壺 B1 型と共伴するが、蓋坏 A4・5 型や長脚無蓋高坏 A3 型、瓹 A5・7 型、直口壺 B2 型、さらにＢⅠ１型は長頸壺や横瓶、平瓶とも共伴する。出現時期はＡ型と重なるが、長期間の生産を想定できよう。Ⅱ型は蓋坏 A3 型とは共伴しない。2-1 型と 2-2 型は、共伴する器種型式に共通するものが多いが、蓋坏 A7 型や長脚無蓋高坏 A6 型、瓹 A7 型等の新相型式とも共伴する 2-2 型の事例から、2-2 型は長期間使用されたと考えられ、また把手が退化する方向性を考慮するならばわずかに後出する可能性がある。把手が完全に退化したⅢ型のなかで、３型の古天神古墳例のみ蓋坏 A3 型と共伴するが、それ以外は全て蓋坏 A4 ～ 6 型や A7 型という後出する蓋坏型式と伴出する。またＢⅢ型には低脚無蓋高坏 A3 型や瓹 A4 型と共伴する事例がある。一方でＣ型は時期幅をある程度限定できる事例が少ないものの、蓋坏 A3 型や長脚無蓋高坏 A2 ～ A3 型、低脚無蓋高坏 A3 型、瓹 A4 型、直口壺 A・B1 型といった古相を示す型式とは共伴しないと思われる。これらを踏まえるとＢⅢ型とＣⅢ型は同時期に併存しているがＢⅢ型が先行する可能性がある。Ⅱ型は型式学的にはⅢ型に先行するが、共伴資料からはそれを明確にし得ず、把手が痕跡化した型式であるⅢ型には大型の資料が認められない。小ぶりな提瓶は早い段階で把手の退化が急速に進行し、大型の提瓶の把手は退化して穴が塞がりつつも後の段階までかろうじて把手の態を残していたようである。

なお、胴部形態については、Ａ型はいずれも底部側面が平坦なために扁平な胴部であり、Ｂ・Ｃ型は出現当初から底部側面・閉塞側面ともに膨らむため扁平ではないものが多い。この胴張型の提瓶の起源については内的要因なのか外的系譜が辿れるのか等の詳細を本稿では明らかにできなかったが、平底の瓹等と並び出雲地域の特徴と指摘されており〔大谷 1994〕、出雲地域における須恵器の地域性の発現を検討する際の課題のひとつであろう。

このような各器種の共伴関係から想定される提瓶の変遷のなかで、把手にみる実用性の喪失と痕跡化という二つの大きな画期に目を向けると、これらはほぼ同時期に発生しているようである。またその時期以降、提瓶の出土数も増加する。出雲東部において出雲３期に出現した提瓶はある時期に急速に形骸化が進行し、口縁部や把手の形態を自由に組み合わせつつ多量に生産・流通していた様相が伺える。こういった提瓶における出土量の増加や特定部位の退化は、須恵器の大量生産とそれと連動する製作における省力化に関連すると考えられ、高坏の脚部における透かしの退化（A3 型）や短小化（A4 型）、瓹の頸部縮小化（A5 型）や施文の脱落（A7 型）、直口壺 B2 型の増加、出土須恵器の急増等と同質の現象であり、出雲４期以降の特質として把握できよう（第 11 表）。提瓶においてもこの大きな変化、つまりⅡ・Ⅲ型の出現を出雲３期と４期を区分する指標としたい（第 75 図）。

さて、以上の提瓶の分類と変遷から古天神古墳の提瓶を見直すと、大型の 17 はＢⅠ１型であり、出雲３期以降の資料として位置づけられる。一方 18 はＢⅢ３型にあたり、出雲４期の指標とした型式である。



第75図　出雲東部における提瓶の変遷

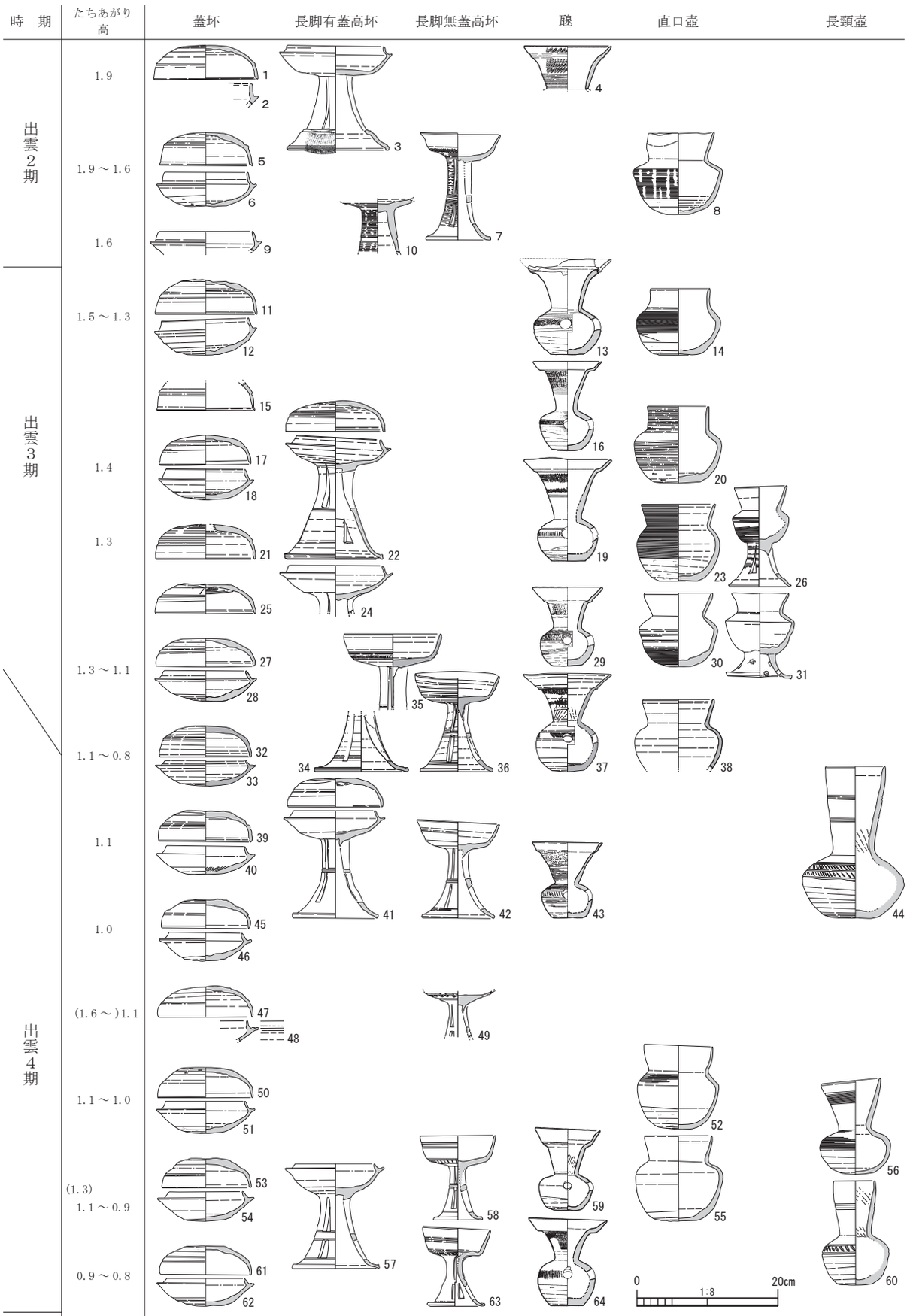
蓋付脚付壺　〔山本 1956〕で比較検討されているように、これに類する資料として金崎１号墳の脚付壺が挙げられる。金崎例は坏状口縁部があまり内傾せずに高く立ち上がり端部に段が表現されており、古天神古墳のものより明らかに古相を示しているが、坏状口縁を有する脚付壺の出土例が少なく、詳細な変遷を追うことはできない[(11)]。

（３）古天神古墳出土須恵器の編年的位置づけ

前項では、各器種の特徴から個々の器種の編年的位置づけを示した。蓋坏は３群に区分可能ではあるが、いずれも出雲３～４期の特徴を兼ね備えたものであり、出雲３期末～４期古相の短期間にまとまる資料と言える。高坏も脚部の短小化は認められないものの透かしや施文に簡略化が認められ、出雲３～４期にまたがる特徴をもつ。瑳は頸部が比較的短く施文も粗雑化しており出雲４期的特徴を呈する。直口壺もほぼ定型化を達成した出雲４期段階の資料と言えよう。

このように見ると、古天神古墳の須恵器は出雲３～４期にまたがる短期間に帰属するまとまりの良い資料と言えるが、これらを古相と新相とに細分し、追葬を想定するという解釈も可能である〔角田 1993〕。発掘調査に基づく所見を欠くため断定は不可能であるが、追葬の有無を検討する必要はあろう。そこで、伊賀見１号墳出土須恵器を検討の俎上にあげたい。伊賀見１号墳は昭和 33 年に山本清らによって発掘された石棺式石室をもつ前方後方墳である[(12)]。注目されるのは、羨道前部を構築後には解体しなければ切石の羨門閉塞石を撤去できず、石室に入れない構造をもつ点である。遺物の出土状況や遺存状況により後に撹乱を受けたことは確実であるものの、副葬品のセットとしては初葬時の状態から追加されていない可能性が高い。この伊賀見１号墳の須恵器には、組み合って出土した蓋坏 A4 型２組、脚部を失った無蓋高坏（おそらく長脚無蓋高坏）１点、瑳 A5 型１点、提瓶ＢⅡ2-2 型とＢⅢ３型の各１点、羨道部で出土した大型瑳１点がある。ここでは共時性を有する別型式の提瓶２点がセットとなっている。提瓶がセットで副葬されていた可能性のある事例としては他にも、同型式のうちに収まる出土須恵器の一群に提瓶を複数点もつ田和山１号墳例や八神横穴墓群１号横穴墓例、須恵器に時間幅が認められるものの同型式同サイズの提瓶ＢⅠ４型が２点出土している島田池遺跡６区８号横穴墓例等がある。あくまでも想像に過ぎないが、この時期に提瓶を複数点含めるという副葬須恵器様式が存在した可能性も感じさせる。

ここで、古天神古墳の提瓶について今一度目を向けよう。古天神古墳の提瓶のうち１点はＢⅠ１型であるが伊賀見１号墳のＢⅡ2-2 型とは併存してよく、もう１点のＢⅢ３型は伊賀見１号墳と共通する。新旧の型式として認識されがちな古天神古墳の提瓶２点は共時性を有しており、セットとして副葬された可能性も否定はできないのではないだろうか。古天神古墳の須恵器に追葬を想定しない場合、提瓶ＢⅢ３型は出雲３期の指標とされる蓋坏 A3 型と共伴する唯一の事例となる。ただし蓋坏は大量に生産されるものであり、以前指摘したように出雲３～４期といった過渡期には大谷分類に合致しないタイプも含め複数のタイプが併存する〔岩本 2016〕。そのような状況下では、一括性の高い遺物群に出雲３期に比定される型式と出雲４期に比定される型式が共伴することは十分に想定できよう。また、古天神古墳の須恵器は、蓋坏や直口壺に見るように出雲３期的な特徴と出雲４期のそれとがひとつの資料に混在しており型式の判断に迷う資料が存在することも確かである。したがって、古天神古墳出土須恵器のなかに出雲３期に比定される蓋坏型式も存在することを根拠に直ちに追葬を想定して遺物群を細分することは早計であろう。追葬を想定しない場合、出雲４期に副葬された須恵器の一群に出雲３期的様相を保持した蓋坏や大型高坏が含まれていたという状況が復元される。



１～４：伝宇牟加比売命御陵古墳、５～８：岩屋遺跡Ⅰ区２号墳、９ ,10：山代二子塚古墳、11～14：岡田薬師古墳、15,16：岡田山１号墳、17～20：中竹矢２号横穴、21～23：魚見塚古墳、24：東淵寺古墳、25,26：御崎山古墳（初葬）、27～31：中竹矢１号横穴、32～38：古天神古墳、39～44：御崎山古墳（追葬）、45～46：団原古墳、47～49：岩屋後古墳、50～52：島田池遺跡４区 11 号横穴墓、53～56：臼ヨクリ遺跡 N-1 号横穴、57～60：向山１号墳、61～64：高広遺跡Ⅳ区１号横穴

第 76 図　出雲東部における須恵器の変遷と古天神古墳

おわりに

最後に、古天神古墳出土須恵器の位置づけを出雲東部における須恵器の変遷のなかで確認しておきたい。第76図は、ある程度良好な出土状況をもつ出雲東部の古墳出土須恵器について、蓋坏の口径／受け部径とたちあがり高を主な指標として、共伴する長脚高坏・瓿・直口壺・長頸壺を併載したものである。古天神古墳の蓋坏のたちあがりは1.1～0.8cmと低い部類に入る。この数値に近い蓋坏の多くは天井部／底部の回転ヘラケズリが粗く身のたちあがりは内傾率を増しており、直口系の壺と共伴すること等から出雲４期の指標となる〔岩本2016〕。さらに、古天神古墳の須恵器には、蓋坏における新相の特徴だけでなく、高坏の透かしや瓿の施文粗雑化・短頸化、提瓶の把手の痕跡化に、省力化・形骸化の発現が認められる。古天神古墳の蓋坏よりややたちあがりの高い蓋坏が出土した中竹矢１号横穴でも短頸化した瓿A5が共伴しており、中竹矢１号横穴や古天神古墳の須恵器が、出雲４期に認められる須恵器の大量生産に伴う生産面の変化を先駆け的に確認できる事例と言えよう。連続する遺物の変化を型式で区別し時期区分することは、特に過渡的様相をもつ場合には困難を伴う。また、古天神古墳に敢えて追葬を認める必要があるのかどうかは結論のでない難しい問題であるが、いずれにせよ、古天神古墳の須恵器は、蓋坏、高坏、瓿、提瓶のいずれの器種も、須恵器が大量に生産されはじめることと連動した省力化・形骸化・退化が進行しはじめる段階の実態を示す資料と言えよう。

謝　辞

本稿をなすにあたり、以下の方々と機関からご高配を賜りました。末筆ながら記して感謝申し上げます（敬称略、五十音順）。

赤沢秀則　池淵俊一　今井智恵　上山晶子　高屋茂男　松本岩雄　三宅和子　島根県教育庁埋蔵文化財調査センター　島根県立八雲立つ風土記の丘　松江市教育委員会

註

（１）蓋坏については蓋と身が各２点図示されているが、「実査し得たのは僅かに１例であり、而もそれは蓋を欠くものであった」としている。

（２）以前に検討した際には古天神古墳出土須恵器の実見がかなわなかったため、〔角田1993〕の図面から得られた数値を使用した。資料の計測の際には焼成による歪み等の影響が少ないと考えられる部分を複数箇所計測し、そのなかで低い数値を使用している。

（３）出雲３期にも大谷分類γ１類のように端部に段や沈線を施さずに丸く収めるものもあり、同一の遺構で共伴することもある〔大谷1994〕。製作地・集団の別を表しているのかもしれない。

（４）３は凹線のような太い沈線がめぐるが、私見では新しい資料に認められる特徴と思われる。

（５）高坏の変遷は〔大谷1994〕によるが、坏部の装飾の変遷に関する詳細は、筆者の私見によるところもある。

（６）上段透かしがしっかりと貫通しない点は、御崎山古墳や中竹矢１号横穴、岩屋後古墳、島田池６区13号穴出土資料等と共通する特徴であり、これらは出雲３期に位置付けられている資料の中でも新相のものと４期の資料である。ただし、御崎山古墳や中竹矢１号墳の資料は瓿A5型と共伴しており、瓿A5型は、この２例以外では出雲４期の範疇で捉えられる。筆者は現在のところ高坏の透かしの貫通具合はある程度出雲４期の指標になるのではないかと考えている。ただし、大型の高坏は脚基部が太く透かしを貫通して開けやすいためこの限りではない。

（７）本稿では出雲東部とは現在の松江・安来市域とする。

（８）現状ではＢＩア型式の資料は存在しないが、環状把手の下端が「しっかりと」接合されているか「貼り付けただけ」かどうかの判断に迷う資料もあり、今後見出される可能性はある。

（９）なるべく想定される時期幅の短い良好な出土状況の資料を検討の対象としたが、横穴系埋葬施設から出土

する資料が大半を占めており、時期に幅を持たせなければならないものも参考にせざるを得ない。各器種の型式は〔大谷 1994〕によるが、直口壺は〔岩本 2016〕の分類を用い、長頸壺は〔大谷 1994〕の１型に先行すると思われる口頸部が長くあまり外反しないタイプに限定している。直口系口縁でコブ状およびボタン状把手をもつ提瓶であるＣⅢは、資料数は非常に多いもののその大半が出雲４期～５期の時間幅をもち追葬も想定される一括性の低い出土状況の資料であるため、ある程度時期が限定できる資料は非常に少ない。広口系口縁でコブ状およびボタン状把手をもつＢⅢも出土資料数はややＣⅢより少ない程度だが同様に帰属時期の不明な資料が多い。

（10）出雲３～４期に比定されるカギ状把手の資料は他にも数例あるが、出雲地域の特徴とはやや異なる須恵器が出土する遺跡が多く、イレギュラーな資料を含む可能性が高い。練行８号横穴墓は伯耆の特徴を有する須恵器が出土しており、二名留１号墳や岩屋口南遺跡Ⅲ区の横穴墓からも系譜は不明ながら出雲地域のものとは特徴を異にする須恵器が出土している。

（11）脚付壺には他に薄井原古墳第２号石室出土の脚付短頸壺、放れ山古墳出土の脚付長頸壺がある。放れ山古墳資料は長頸壺の消長からも古天神古墳より新しい資料と思われるが、薄井原古墳資料については、短頸壺から前後関係を示すことは困難である。ただ、大型の短頸壺は階層的に上位に位置付けられる古墳で出土する場合が多いと思われる。伊賀見１号墳で出土している大型瑳等を含め、やや特殊な器種をもつ古墳について改めて位置付ける必要があるだろう。

（12）伊賀見１号墳の墳形については、発掘調査時には円墳とされ、その後は方墳と考えられていたが、測量調査の結果、現在は前方後方墳とされている。

引用文献

足立克己・丹羽野裕　1984「須恵器」『高広遺跡発掘調査報告書』島根県教育委員会

池淵俊一　2015「出雲の古墳編年について」『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』島根県古代文化センター

岩本真実　2016「出土須恵器からみた魚見塚古墳・東淵寺古墳の年代的位置付け」『魚見塚古墳・東淵寺古墳発掘調査報告書』島根県教育委員会

大谷晃二　1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第 11 集　島根考古学会

大谷晃二　1996「出雲東部における御崎山古墳の位置付け」『御崎山古墳の研究』島根県立八雲立つ風土記の丘研究紀要Ⅲ　島根県教育委員会・島根県立八雲立つ風土記の丘

角田徳幸　1993「石棺式石室の系譜」『島根考古学会誌』第 10 集　島根考古学会

門脇俊彦　1985「西山陰における横穴墓の需要（上）」『島根考古学会誌』第２集　島根考古学会

坂本豊治　2012「須恵器からみた中村１号墳」『中村１号墳』出雲市文化環境部文化財課

西尾克己・丹羽野裕　1991「山陰の横穴墓―出雲地方を中心として―」『おおいた考古』第４集　大分県考古学会

丹羽野裕　1997「安来平野東縁丘陵で調査された横穴墓について」『岩屋口北遺跡・臼コクリ遺跡（Ｆ区）』島根県教育委員会

萩本　勝・佐古和枝　1984「須恵器について」『陰田』米子市教育委員会

山本　清　1955「島根大学敷地薬師山古墳遺物について」『島根大学論集（人文科学）』５号（『山陰古墳文化の研究』山本清先生退官記念論集刊行会 1971 年所収）

山本　清　1956「須恵器より見たる出雲地方石棺式石室の時期について」『島根大学論集（人文科学）』６号　島根大学（『山陰古墳文化の研究』山本清先生退官記念論集刊行会 1971 年所収）

山本　清　1960「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念論集』島根大学（『山陰古墳文化の研究』山本清先生退官記念論集刊行会 1971 年所収）

渡辺貞幸・内田律雄・曳野律夫・松本岩雄　1991「出雲」『前方後円墳集成』中国・四国編　山川出版社

遺跡文献（第９表、第 75・76 図の作成にあたり参照した文献）

財団法人松江市教育文化振興事業団　1994『菅沢谷横穴群』

島根県教育委員会　1969a「安来・小丸子山横穴」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅰ集

島根県教育委員会　1969b「安来・うそ谷横穴群」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅰ集
島根県教育委員会　1977「狐谷横穴群」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅶ集
島根県教育委員会　1978『岩屋後古墳発掘調査概報』
島根県教育委員会　1983「Ⅳ中竹矢遺跡」『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』
島根県教育委員会　1984『高広遺跡発掘調査報告書』
島根県教育委員会　1986『岡田薬師古墳調査報告書』
島根県教育委員会　1987『出雲岡田山古墳』
島根県教育委員会　1988「松江・南尾横穴墓」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第ⅩⅣ集
島根県教育委員会　1989a「１．団原古墳」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅵ』
島根県教育委員会　1989b「松江・小倉見谷横穴群」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第 XV 集
島根県教育委員会　1994『臼コクリ遺跡・大原遺跡』
島根県教育委員会　1997a『岩屋口北遺跡・臼コクリ遺跡（Ｆ区）』
島根県教育委員会　1997b『島田池遺跡・鷂貫遺跡』
島根県教育委員会　1997c『松本古墳群・大角山古墳群・すべりざこ古墳群』
島根県教育委員会　1998『渋山池古墳群』
島根県教育委員会　2001a『岩屋遺跡・平床Ⅱ遺跡』
島根県教育委員会　2001b『山代二子塚古墳整備事業報告書』
島根県教育委員会　2016『魚見塚古墳・東淵寺古墳発掘調査報告書』
島根県教育委員会・島根県立八雲立つ風土記の丘　1996『御崎山古墳の研究』島根県立八雲立つ風土記の丘研究紀要Ⅲ
東出雲町教育委員会　2008『古城山遺跡』
松江市教育委員会　1991『田和山古墳群発掘調査概報』
松江市教育委員会　1993『伝宇牟加比売命御陵古墳報告書』
松江市教育委員会　1998『向山古墳群発掘調査報告書』
松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団　1998『袋尻遺跡群発掘調査報告書』
松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団　1999『西尾地区農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
安来市教育委員会　2001『八神横穴墓群』

挿図出典

第 75 図：岡田薬師古墳〔島根県教育委員会 1986〕、中竹矢１号横穴〔島根県教育委員会 1983〕、高広遺跡Ⅰ区３号横穴・Ⅳ区－１号横穴〔島根県教育委員会 1984〕、田和山１号墳〔島根県教育委員会 1991〕、小倉見谷横穴群４号穴〔島根県教育委員会 1989b〕、岩屋遺跡Ⅰ区５号墳２号石棺〔島根県教育委員会 2001a〕、古天神古墳〔本書〕、狐谷横穴群 10 号横穴〔島根県教育委員会 1977〕、遅倉横穴墓群第４号横穴墓〔松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 1999〕、八神１号横穴墓〔安来市教育委員会 2001〕、臼コクリ遺跡 N-3 号横穴〔島根県教育委員会 1994〕、伊賀見１号墳〔角田 1993〕、松本３号横穴墓〔島根県教育委員会 1997c〕、古城山遺跡３号横穴〔東出雲町教育委員会 2008〕、向山１号墳〔松江市教育委員会 1998〕、島田池遺跡６区 14 号横穴墓〔島根県教育委員会 1997b〕、渋山池１号横穴墓〔島根県教育委員会 1998〕。

第 76 図：伝宇牟加比売命御陵古墳〔松江市教育委員会 1993〕、岩屋遺跡Ⅰ区２号墳〔島根県教育委員会 2001a〕、山代二子塚古墳〔島根県教育委員会 2001b〕、岡田薬師古墳〔島根県教育委員会 1986〕、岡田山１号墳〔島根県教育委員会 1987〕、中竹矢１号横穴・２号横穴〔島根県教育委員会 1983〕、魚見塚古墳〔島根県教育委員会 2016〕、東淵寺古墳〔島根県教育委員会 2016〕、御崎山古墳〔島根県教育委員会・島根県立八雲立つ風土記の丘 1996〕、古天神古墳〔本書〕、団原古墳〔島根県教育委員会 1989a〕、岩屋後古墳〔島根県教育委員会 1978〕、島田池遺跡４区 11 号横穴墓〔島根県教育委員会 1997b〕、臼コクリ遺跡 N-1 号横穴〔島根県教育委員会 1994〕、向山１号墳〔松江市教育委員会 1998〕、高広遺跡Ⅳ区１号横穴〔島根県教育委員会 1984〕。